

京都大学	博士（地球環境学）	氏名	Joshua John Jodoin
論文題目	Using Education for Sustainable Development (ESD) for Language Learners: Study of University Approaches （持続可能な開発のための教育 (ESD) を用いた語学学習に関する研究 ― 学士課程教育における方法論の検討―）		
(論文内容の要旨)			
本論文は、日本の大学の学士課程において使用されている英語教科書について、環境問題を含む内容に関する現況を分析し、教科書が持続可能性というテーマに対していかに貢献を果たしているか、知識・価値観・規範意識という3つの観点から検討したものである。また、高等教育学士課程における持続可能な開発のための教育（以下、ESD と表記する）のベストプラクティスを適用した事例研究を行い、ESD を外国語としての英語（以下、EFL と表記する）教育に取り入れるための枠組を提起した。 以下、本論文を構成する各 8 章について概観する。 第 1 章では、研究の目的、研究課題、および理論的根拠を示した。本章では、日本においては、ESD の内容とアプローチは初等教育ならびに中等教育のカリキュラムには取り入れられているが、高等教育では文部科学省が各大学に対して SDGs と持続可能性に関する教育を奨励しているにも関わらず、教員の ESD に関する知識不足やカリキュラムの作成に関する研修等の不足による低調が見られることを問題の所在として言及した。一方で、多くの大学生は EFL を必修科目として学んでいるが、環境問題に関するトピックは教科書でも多く採用されているテーマであるため、EFL は持続可能性に関するコンテンツを学生たちに普及させるためのプラットフォームとして大いなる可能性を有していることを示唆した。 第 2 章では、本研究の方法について論じた。本研究では、筆者が作成した、一般的に使用される EFL 教科書に掲載された環境問題に関する内容を含む 55,000 以上の単語と画像からなるコーパスについて、ソフトウェアによる分析を行い、分析概念としては Clement の KVP モデル（2006）に基づく理論的枠組を用い、文章と画像が、持続可能性に関する知識と価値観との関連性を有しているかを検討したこと、その上で、有効性を検証する目的で、ESD のベストプラクティスの実施を事例研究として行ったことが報告された。 第 3 章と第 4 章では、5 種類のソフトウェアと KVP モデルを用いての、コーパスの文章と画像の検証の結果について論じている。現在のコーパスにおいては、学生の環境問題に関する知識の向上への寄与は示唆されるが、持続可能性への意欲や行動を促すような意図が見られないため、文章と画像だけでは持続可能性の概念が網羅され得ないことが明らかになった。 第 5 章では、2016 年度と 2017 年度における私立大学での環境倫理に関する EFL の 3 クラスでの調査が事例研究として取り上げられた。2 つの年度においては、同じ内容で異なる教授方法が採用された。具体的には、前者では教授者主導、後者ではよりインタラクティブなアプローチの採用により学習者中心の ESD が展開され、それぞれの学習成果が比較された。成績、アンケート、および振り返りの分析の結果、両年度の学生は、環境リテラシーの習得については近似値を示した一方で、2017 年度の学生は、VBN スケール上の環境への責任の帰属、環境問題の帰結への認識、規範意識に関して、著しく高いレベルを示したことを明らかにした。 第 6 章では、持続可能な開発のための外国語教育（以下、LESD と表記する）に関して、ESD と EFL を統合するために筆者が提起した理論枠組が論じられている。LESD アプローチは、SDGs の内容を EFL の授業に取り入れることにより、持続可能性な社会を構築するために必要な態度、価値観、行動の変化を促進することを目的としていることが主張された。第 7 章では、EFL の教科書に対して、人間と環境の相互作用と環境問題に関する情報をいかに取り入れるかについての改善方法を提示している。第 8 章では、これまでの主要な調査結果を要約した。			

(論文審査の結果の要旨)

持続可能な開発目標 SDGs の目標 4 で言及されているように、教育は、より持続可能で公平な社会を促進するために必要な知識、態度、信念、規範意識、行動の育成に重要な役割を果たすものである。ESD 的なアプローチは、一般的に初等および中等教育レベルの学校教育に採用されているが、高等教育においては、環境学の専門授業以外ではほぼ用いられていないと言ってよい。しかしながら、日本や他の非英語圏における学士課程のほとんどの学生は外国語として英語を必修科目として学び、多くの EFL 教科書は環境問題をテーマにしている。これまでの教科書の編纂においては環境リテラシーよりも言語の習得が優先されてきたが、今後、環境問題に関する内容を効果的に取り上げることで、持続可能性に関する学習は飛躍的に改善されるであろう。本研究は、環境問題に関する内容が現在 EFL でどのように教授されているか、ESD 的なアプローチをどのように EFL クラスで適用し持続可能性の学習成果を実現するかを分析しようとする論考として、独自性を持つ。以下に、本研究の主要な成果として審査された内容を列挙する。

第一に、大学の EFL 教科書は、概して、学生の環境リテラシーを向上させる可能性を有し、SDGs 目標 4 を促進し得る環境問題に関する内容が含まれているにも関わらず、文章や画像の多くが効果的に用いられていないことを明らかにした。これは、現在の教科書が、学生の環境問題に関する態度や行動についての内省を想起させる内容になっていないこと、また、採用されたトピック同士の繋がりがなく、前後の章における相互的引用を通じて資料を効果的に知識として蓄積させる構造をとっていないことなどが原因として考えられる。EFL の授業を受ける学生の多さと、気候変動や SDGs などの環境問題に関するトピックについての学生と教員双方の関心の低調を鑑みれば、本研究は、高等教育において大いに改革の余地がある分野のうちの一つを明らかにしたと言える。

第二に、本研究は、学習者中心の ESD アプローチの導入、問題解決力と批判的思考力に焦点を当て、持続可能な社会を構築する力を育成することにより、学生のパフォーマンスを大幅に向上させ、持続可能性に向けた価値観、行動、規範意識を積極的に変化させることができることを明らかにした。

第三に、本研究は、日本や諸外国の大学にとって重要な視点をもたらした。今日、多くの大学は、外国語と専門知識を向上させるために、内容言語統合型学習 (CLIL) の推進を試みている。多くの教員は、環境科学、生物学、自然科学などの専門分野について英語を用いて教授することを求められているが、言語スキルの向上と専門分野についての洞察を深める双方のカリキュラムを統合させていく手法に関する情報は不足している。筆者は、ESD 的なアプローチ、SDGs を含むカリキュラム、および EFL を専門としない教授者が授業に適用できるベストプラクティスから重要な要素を抽出し、効果的なフレームワークを開発した。このフレームワークに基づき、著者は教授者用指導要領を作成し、ワークショップを実施する予定である。これは高等教育におけるより効果的な学習成果および地球環境学に大きく寄与するものである。

本研究の独自性、調査結果の意義、およびこの研究において用いられた方法論の妥当性により、この論文は査読者の承認基準を満たす。よって本論文は博士 (地球環境学) の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年 8 月 1 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。